

〔書評〕

尾崎知光著

『国語学史の基礎的研究』を読む

一

大著『国語学史の基礎的研究——近世の活語研究を中心として——』の著者尾崎知光（おざきさとあきら）氏は時枝誠記博士の高弟である。私が尾崎氏の論文をはじめ読んでしたのは「所謂自敬表現について」（名古屋大学文学部研究論集X）「文学4、昭和三十年」であったと思う。これは氏が昭和二十七年十月に東京大学で行われた国語学会研究発表会に研究発表されたものに少し手を加えられたものである。この論文がまこと珠玉の名編であったので、私は氏が時枝博士の門下としていつの日にか大きな敬語史論考をものされるであろうと考えた。ところが、それから一、二年たつて上野市の沖森書店の「沖森書店書目」（昭和三十二年五月）に、

天爾乎波義憤鈔 横 大形五十七葉 一冊

宝曆中 菅野信頼著 天保頃写

というてにをは研究書が出た。この天爾乎波義憤鈔一冊は雀部信頼の著で宝暦十年に成立した。著者の伝記は未詳であるが、写本によつては雀部信頼を信頼としたものもある。私はこの「沖森書店書目」のそれに著者が菅野信頼となっているのにひかれ早速注文したところ

根 来 司

ろが、それはもう売れてしまったという。それでこのようになっては関係の写本をいっただろうと思つて書店に問い合せてみたら、「それは名古屋の尾崎知光さんです。」という返事が来た。尾崎氏が国語学史に関心を持たれているのを知つたのはこの時であつたが、その後学術雑誌その他に国語学史なかんづく近世の活語研究に関する論文が目につくようになるのである。

本書の内容についてはあとでまた詳しく述べるが、全体は八章三十四編から成つている。今これらの三十四編がどのように書かれたかその発表年次を表に示してみると次のようになる。表中追加とあるのは本書の成るにあたり、新たに追加されたものである。

昭和31年	1
32年	1
34年	1
38年	1
43年	1
47年	1
48年	1
49年	2
50年	2
51年	2
52年	6
53年	2
54年	1
55年	1
56年	1
57年	1
58年	3
追加	6

この表を見るとたちどころに本書は尾崎氏の長年の努力が結晶したものと知れよう。次にこれらの三十四編がどのようなものに書か

れたかをさぐると、「愛知県立大学文学部論集」が十一編で最も多く、続いて「国語と国文学」が五編である。ついで「文莫」に三編、「文学語学」に二編、「説林」に二編書かれている。あと「愛知県立女子大学紀要」「名古屋大学国語国文学」「郷土文化」「岩波講座日本語文法Ⅰ」「松村明教授還暦記念国語学と国語史」「竹岡正夫編国語学史論叢」にそれぞれ一編ずつである。

二

そこでまず本書の目次を見ることからはじめようと思う。

まへがき 目次

〈八頁〉

第一章 文法研究史の素描——上代から近世にいたる——

〈三八頁〉

一、文法研究の歴史——上代から近世まで——

第二章 近世以前の二、三の問題

〈四八頁〉

一、上代国語学史における二、三の問題、二、「手爾葉大概抄」の伝流について——鈴木敏から時枝学説にいたる——、三、中世における「体用」の観念とその展開

第三章 本居宣長に関する問題

〈一〇〇頁〉

一、本居宣長の初期でにをは研究への道程、二、「てにをは紐鏡」の成立とその学説、三、「三集類頌」の検討——「ひも鏡」との関係をめぐる——、四、「活用言の冊子」から「御国詞活用抄」へ——川村本御国詞活用抄と御国辞活用鏡——、五、「排芦小船」は宝暦八、九年の作か

第四章 宣長の周辺・富士谷成章などに関する問題 〈四四頁〉

一、柴田常昭「詞つかひ」——その学説の主要点について——、二、富士谷成章の周辺についての覚書、三、「富士之山文」について

第五章 鈴木敏に関する問題

〈八六頁〉

鈴木敏の国語学——「活語断統譜」「言語四種論」「雅語音声考」の関連について——、二、「活語トマリモシノ説」の考察——その成立と本居先生——、三、「活語トマリモシノ説」の紹介・翻刻、四、京大蔵伴信友校蔵書『言語音声考・言語四種別考』について、五、「活語断統譜」などの成立をめぐる、六、「活語活用格」の成立、七、中山清寛の『見聞録日記』と鈴木敏

第六章 本居春庭・義門に関する問題

〈八六頁〉

一、初稿本「詞八衢」——その内容と成立について——、二、「詞通路」に於ける自他と延約、三、「詞通路」における「兼用の事」について、四、「道廻佐喜草」について、五、義門の活語研究の一過程——改稿本「詞の道しるべ」について——

第七章 富樫広蔭に関する問題

〈一二六頁〉

一、富樫広蔭の文法学説——その主要点と春庭の学説の継承にふれて——、二、新出本・富樫広蔭「詞八衢捷徑」について（付復刻）、三、書入本による「詞玉橋」寸見、四、草稿本「詞玉稿」の成立、五、「詞玉稿」の学説の成立——神宮文庫本による——、六、広蔭の古今集研究——「古今和歌集紀氏直伝解について」——、七、富樫広蔭の未知の著書について

第八章 詞八衢に関する資料

〈一六六頁〉

一、初稿本「詞八衢」の影印翻字について、二、同影印、三、同翻字

索引 後記

〈一二頁〉

（なお各章の下にかりにへゝをし頁数を記したのはその章に費している頁数である。）

私はかねがねこういう所に目次を掲げるのはさして意味がないと思っているのであるが、何しろたいした浩瀚な書物であるからこうしなないと内容がよくつかめないのである。今この目次を少し深く見るとそこには素描があり論述があり解説があり紹介があり復刻があり翻刻があつて決して整然としてはいえない。また副題にあるように近世の活語研究とはいっても本居宣長、鈴木服、本居春庭、富樫広隆らについては詳述しているけれども、富士谷成章、義門についてはそうでない。しかし、私は実際に本書を読んでいくとこの

『国語学史の基礎的研究』という書物につかまつてしまい、著者の尾崎光氏につかまつてしまう。「まへがき」を見ると氏は時枝誠記博士の国語学に関して説き、その名著『国語学史』（昭和十五年）との関わりを述べている。そこに「先師時枝博士からは『国語学史』の改訂版刊行直前に、その誤植を報告したのに対し、今後新しい国語学史を書き直してほしいとの御激励を賜はつたことが心に深く残つてゐる。」としるされているのが印象的である。思えば時枝博士が『国語学史』の改版を出されたのは昭和四十一年であつたが、そういえば博士は昭和十五年に『国語学史』を公にされたあと、これをなげやりにかえりみられなかつた。ただ東京大学において昭和二十八年程度および昭和三十年程度には国語学史を講義されているので、そのころには少し見なおそうとされたのかもしれない。しかし、博士がこのように『国語学史』をうちすてられたのは、おそらく博士自身自己の学問の全体系が未完成のために学者の間に種々問題にされていると観じられ、自己の学問を早く完成させるべくひたすら努力されていたためであろうと思う。知られるとおり国語学の父といわれた上田万年博士は、新しい国語学の建設のために国語学史を考究さ

れたのであるが、その上田博士が既成のヨーロッパ言語学によって学史を編もうとされたのに対して、時枝博士は学史に伝統的な過去の日本人の言語研究の中に根源的な原理を見いだそうとされたのである。この時枝博士から国語学史の研究を託されたのが尾崎氏である。

氏は「まへがき」に、「私の研究は、先師時枝博士のやうに、国語学史の根源の思想を追求して、新しい言語理論を樹てることを目ざすなどといふ高級なものではなく、甚だ次元の低いものである。真の国語学史の研究は、過去の国語研究を説明するだけではなく、それらを通流する言語に対する思想を歴史としてとらへ、その根源にあるものをさぐりあて、それを学問として生かすことでなければならぬであらう。時枝博士の学問は正にそれである。さうした点で、私のはあくまでその基礎となる低次の研究といふべきものである。」と述べられているが、これは氏のへりくだつたことばであろう。第一章の一「文法研究の歴史——上代から近世まで——」は上代から近世にいたる文法研究史の素描であるが、そのあとの第二章の二「手爾葉大概抄」の伝流について——鈴木服から時枝学説にいたる——を見ると、ここで氏は時枝博士は鈴木服をさわめて高く評価されたけれども、博士の文法学説と服のそれとは異なるのではないかと難する学者がある。しかし、博士が服に傾倒していたことは事実であつて、自分は時枝博士の学説の真意を追求していくと、一見違ふように見えるその学説が不思議なほど服の学説に似てくるように思われてならず、これによって博士が亡くなる年まであのように服に心酔していられた謎がとけるような気がすると説かれているが、このようなことは尾崎氏において他に誰がいえるであろうか。

だが、本書の功績はこういうところにあるのではなく、むしろ国語研究の新しい資料を丁寧読んでいくことからえられたところに見いだせるといつてよい。尾崎氏はやはり「まへがき」で氏自身の読み方を、「私の国語学史の研究は、過去の語学文献を、恰も古典を解説するやうに、ただ読みたことに始終してゐるに過ぎない。それを虚心に読んで行くと、どうしても今までの学者の解説では納得のゆかぬ場合が多く、特に新しい資料が発見され、それに拠つて考へるとき、自説が裏付けられるやうなこともある。私は、国語学

書を正しく解釈するためには、その書をその著者の学問生活の中に置いて読みとらなければ理解しにくく、特にその著書が成立する初期の段階からの生成過程を明らかにすることが大切であると考へ、成稿本のみでなく草稿本の探求、研究に重大な関心を払ふやうになつた。」といつておられるのがそれである。これが氏の国語学史の方法である。これは高所からはつしと思の根源をとらえる時枝博士が思ひえがかれた国語学史でないかもしれない。

私は今しがたいたことが確かであることは本書のどこを開いてもわかる。たとえば第三章の二「てにをは紐鏡」の成立とその学説」は氏が片々たる一枚の図表を子細に検討されて、この図表にのちに本居宣長から子の春庭へと発展していく語学上の重要な問題が多く提示されていることを証していられる。私などてにをは紐鏡が同じ宣長の詞の玉緒に比べて幼稚なものであると考へていたのは間違ひであつたと思ひしらされるのである。また第五章の一「鈴木眼の国語学——『活語断統譜』『言語四種論』『雅語声考』の関連について——」は鈴木眼が享和三年ごろに著したこの三著を読み合わせ眼の学説の発展を説かれたものである。この三著は本居宣長の御国詞活用抄に影響され

て眼の独自の考察による学説の体系を示すものであるが、それは活語断統譜の形状詞・作用詞の分別から、言語四種論の詞の四種の分類へ、さらに言語四種論のてにをはと詞の別を声と詞としてとらえることから、声と詞へと言語が形成されていく実態を明かにする雅語音声考の研究へと続くと考え、はじめて眼の学説が正しく理解できるという。私はこの論述は本書の中でも名編と考へる。

さらにまた第六章の一「初稿本『詞八衢』——その内容と成立について——」は初稿本詞八衢によつて本居春庭の学説の生成過程を論じたもので、この論述などにかく数多くの資料を読みといひいられる氏の独擅場であるといつてよい。このように見てくると尾崎氏の国語学史の方法はほとんど研究対象の中に分けはいつていく。はじめどこへいつてしまうのかわからないのであるが、いくうちにどれだけさ迷つても対象そのものの中から何か確かなものをつかまえてしまふ。こういう方法であることがわかる。私はこうした方法に興味を持つ。それは第七章の一「富樫広蔭の文法学説——その主要点と春庭の学説の継承に於て——」の中で、氏は富樫広蔭の詞玉橋の学説をうかがうにはそこに書かれた広蔭の言説を忠実に読みたればよいのだがとして、しかし、一巻の書に対してはなるべく著者の意に添ふような解釈を示しておくことはそれを読みたどらうとする人々には便りになることであり、そう考えればそれなりの意味がある。自分が本稿で詞玉橋の主要な説を解説しようとするのはこのように考へてのことであるといふに説いておられて、氏の解説は解説でも並みの解説ではないのである。

それにしても第八章の「詞八衢に関する資料」であるが、学者の

中にはこのように初稿本詞八衢の影印そして翻字に多くの頁数を費す必要があるかどうかと問う人もある。しかし、初稿本詞八衢は尾崎氏がいわれるとおり近時数多く発見された国語学史の資料中、最大重要なものの一つであろう。したがって、これを収めたことは本書を国語学史上類のない近世の活語研究を中心とした書物にする上で、大きな効果をあげていると私は考える。ただそれが春庭の妹美濃が反故の裏を利用したため、影印に裏文字がうつっておりそれが邪魔になりきわめて見にくいものになっている。そこで氏は影印でありのままの姿を示すと同時に、表文字だけの書きの翻字を添えることを試みておられるのであるが、この氏の自筆の翻字が私にはありがたくまたゆかしく思われる。

三

長々と述べて来たが、私が本書を読みおえて驚嘆するのは尾崎光氏が国語学史を書く際の資料の博搜ぶりである。氏は資料という名称を好まない。氏にとつて資料とは何かを研究するためのそれではなく研究対象そのものであるからであるという。私が尾崎氏につかまつてしまうのはこの氏の徹底した博搜ぶりにもある。自分で国語学史を書いてみるとよくわかる。それは福井久蔵博士撰輯の『国語学大系』が厚生閣から公刊されることになって、その第一巻の語法総記が昭和十三年四月に刊行された。その直前に出版社から全一十四巻予約刊行内容見本が出るのであるが、その中に山田孝雄博士が多くの国語学徒に呼びかけ「参加者の誠意に俟つ」と題する推薦文が書かれている。その一文は、「あらゆる文化は歴史を有するものなり。歴史を顧みずしてはその文化の真の理會を得るものにあらず。

わが国語学も亦然り。然るにこの国語の研究の先蹤をたどることは現今に於いて容易にあらず。われわれの如き貧書生にして頼る所なきものは三十年の苦心を費してはじめて纔かにその歴史の一斑を推しうるに止まるのみなり。蔵書の豊富なる書庫を擁するものにとりては或は三十年などの長年月を費さずして之を知り得べきことならずといへども、これをすべての学徒に望むは不可能の事に属す。況んや如何なる蔵書家といへども、天下の書を完全に網羅しうべきにあらざるを以て有無相補ふことを必要とするや言をまたず。ここに於いて古来の国語学書を網羅して学徒に便するの必要を感じること切なるものあり。福井博士のこの挙は、実にこの渴望を医するに足るものあり。」というようにはじまる。読む人はこれがはたしてあの名著『国語学史要』（昭和十年）、『国語学史』（昭和十八年）を書かれた山田博士の言辭であろうかと疑う人もいるかもしれないが、当時国語学史を書くのにはこのような困難があつたのである。

それかあらぬか、氏も「まへがき」で、「わたくしが国語学史の研究に多少の関心をもつやうになつたのは、三十年ほど前のことである。しかしそのころはまだ国語学史の研究も一般に低調であり、私自身もそれに専念しようといふ気はなかつた。ただ幸ひなことに、私の居住地が近世国学の中心地の尾張、伊勢に近く、遺存してある資料を入手したり、閲覧したりする便宜に恵まれ、他の土地の人にはない有利な条件のあつたことが、次第に私をその道へと進ませる原因となつた。」と述べられている。松阪市では昭和三十九年に本居家から莫大な資料の寄贈を受けたのを機に、昭和四十五年十一月に本居宣長記念館を建立開館した。ここには宣長の遺稿遺品類をはじめとして本居一族、鈴屋一門の資料一萬点を所蔵し、うち百十三種

三百五十八点が重要文化財に指定されている。加うるに昭和四十三年より新しい『本居官長全集』が筑摩書房から刊行されており、昭和五十九年十二月からは鈴木屋学会が発足し、会員は百六十名と聞く。一方名古屋には早く鈴木服顕彰会があったが、昭和五十年六月ゆかりの離屋会館で多数の賛同をえて鈴木服学会が設立され、会員は百名という。他にこの学会では機関誌「文莫」を第十号まで刊行している。氏はこの両学会の中心的な位置にあるとおぼしいが、氏にはこのような頼る所があるのである。こういう氏であるからこれからも数多くの資料を掘り起こされ一層の考究を続けられて、『国語学史の基礎的研究続編』をさらには『国語学史の基礎的研究続々編』をものされるであろう。

今七百頁を超える大著の索引をア行からワ行まで一つ一つ目を通し、『国語学史の基礎的研究』をなつかしみながらつたない書評をおえたいと思う。

(昭和五十八年十一月三十日発行 笠間書院刊 A5判 七一四頁 一八〇〇〇円)

——神戸大学教授——
(昭和六十一年四月十日 受理)